

【取扱い厳重注意】

543

平成24年3月1日

聴取結果書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局

局員 齊藤修啓

平成24年2月9日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第1 被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

1 被聴取者

池田元久 元経済産業副大臣

2 聴取日時

平成24年2月9日午前10時00分から同日午後0時40分まで

3 聴取場所

衆議院第一議員会館1004号室

4 聴取者

柳田邦男 委員

高嶋智光 参事官

飯崎準 参事官補佐

岡田幸大 参事官補佐

齊藤修啓

5 ICレコーダーによる録音の有無等

あり

なし

第2 聴取内容

事故対応全般について

第3 特記事項

特になし

以上

【取扱い厳重注意】

○質問者 お願いします。

○池田元副大臣 今日はよくお越しいただきました。

まず、資料はあらかじめ、柳田さんが来る前には説明しておきましたけれども、ここに資料と書いたものがございます。あとで追加することもやぶさかではありませんが、私の方で基本的な点でこういう点がいいのではないかと。

まず、1がメモランダム。

これはとりあえず3月11日～15日まで、事故発生後から福島県庁へ移転するまでと。なお、その後、私は3月末からずっと5月20日過ぎまで再び現地へ赴きました。その間は経産省で、それこそ朝から晩まで事故対応及び石油パニックとか電力対策とかやっていました。

まず、このメモランダムは15日まで。そして、メモランダムというのは、秘書官に現地を離れるところ辺りからまとめようといっただけで、まとめ始めたのですが、その他業務が煩雑でして、そのままになっていました。

11月末か12月になって継続を始めて。その前に次のクロノロジーとメモランダムというのを大変でしたがつくったわけです。

これは後で皆さんがコピーをされたい。まず、全体を書いてあって、現地の動きが書いてあって、私のメモが書いてあります。それでも、結構分量があるのです。これは是非、お読みいただければ、東京と福島と立体的にわかると思います。

今日はちょっとページ数が多いので2部のみつけて、そちらに。

3つ目が、3月13日の夜、本部へ送信した8つの文書。文書はこれだけではないのですが、例示です。この後もいっぱいありますけれども、事実上、活動を始めた12日、13日の会議等で配った、決めたことについてせき止めて、私の考えで本部へ送った。いかにどういう活動をしていたかということは俯瞰できるし、よくわかると思います。

それから第4は、トピック的に非常に危機が進行して、その一つである、3月14日朝の現地本部長の判断による注水強化の資料。

5番目は、14日未明から始めた、双葉地域の要救助者のリスト。

6番目が、現地で5日間いたことで私が感じたことで、それに基づいて翌日、すぐに保安院に6項目の指示を出したと。

7番目は、3月15日までのことではなくて、その後、次に行ったとき以降の現地対策本部長の活動。仮払金の支払いとか、住民の一時帰宅、公益立ち入り等々についての、本当に簡単な要点だけの資料ということになります。

では、メモランダムを参照していただきながら、ごくかいつまんでお話をしたいと思います。それで質問にいきたいと思います。資料1でいいですね。

○質問者 これは経産省の公的な記録などとの時系列は、突合せがあるわけですか。

○池田元副大臣 これは原本がありますが、まだ未公表の経産省の時系列です。クロノロジーもそうです。それから、政府の原災本部のクロノロジー的なもの、それから私と秘書

【取扱い厳重注意】

官が持っていた資料から組み立てたというもの。

これは一応、この辺全部まだ未公表です。この3番目だけは公表しているのかな。

資料の説明は以上でございます。

まず、冒頭陳述ではないけれども、後の質問にも関わってくると思うのですが、これをざっと言いますので、あとは詳しくはメモランダムを後で読んでいただければいいので。

地震発生直後には、経産副大臣室におりまして情報が次々入ってきて、経産省としては、途中省いて、午後4時45分だと思うのですが緊急対策本部を開いた。5時には池田副大臣を現地対策本部長として派遣することを決定いたしました。

会議の終わる前に飛び出して、とるものもとりあえず待たせていた車に乗った。私は柳田さんと同様でありましたから、そういうときは早いのです。スクランブルでパッと出たのです。

ところが、黒木審議官が車に乗るからおかしいなと思っていたのですが、車で行くというのです。パトカーの先導がつくというのですが、パトカーの先導が来ない。私の副大臣車の運転手さんが上野方面へ行って、1時間も経ってしまった。これはまずいと思い、松永の事務所に電話して、自衛隊のヘリを手配してくれと言いました。

上野近くまで行って、そこで市ヶ谷の方へハンドルを切って。そこでパトカーがいきましたけれども、そのときはもう人がいっぱいでした。そこから30分ぐらいかかったかな。後で参照してください、時間が全部入っていますから。それで市ヶ谷にようやく着いた。ですから、もう8時半ぐらいになっていた。

それで、小川勝也副大臣がいて、いろいろ自衛隊の話聞いて、準備ができたので飛び立った。そのときは我々の3人だけではなく、原子力保安院の山本君とか、海老根君という、原子力安全委員会の職員も一緒に行ったのです。

サイトの近くには着陸できない。結局、大滝根山分屯地で航空自衛隊のレーダーサイトがある。標高1,000m、まさに山頂にあるわけです。そこに降りた。

そこでは自衛隊が迎えに来てくれて、コーヒー1杯飲んだだけで、すぐに山を下りた。山は真っ白で、自衛隊車の先導で雪道を降りて、下に降りてきたら、それこそ地震の被害が散見されると。道路にひびが入ったり、壊れた家があったりして。それで12時前ぐらいにオフサイトセンターに入った。

しかし、そこではDGというか、非常用ディーゼルが働かなかったということで、幸いにして全く隣接地に県の原子力センターがありまして、そこへ入った。既に内堀副知事も来ておりました。まず、出発のときの対応が悪かったということは、後で指示しました。

そこでまず、状況把握をした。非常に私にとってよかったのは、一緒に黒木審議官が同行して、時間が車の中でありましたから、原子力事故とは何かから、全部大体おさらいできた。

よかったと言ったら語弊があるけれども、NHKのニュースを聞きながらどうするこうするというのは、無学文盲の僕でもかなりわかった。

【取扱い厳重注意】

そこで、まず保安検査官が原子炉の状況を説明してくれるのですが、要領を得ないわけです。原子炉の圧力、温度、水位ですが、どうもはっきりしない。

東電の係長を呼んで、ダウンスケールとかいろいろ、計器が働かないとか勿論、あるわけですがけれども、もうちょっと事実のデータをしっかり把握するように言ったのです。

特にベントが話題になっていましたから。海江田が3時から記者会見をすることになっていましたので、それはちょっと後です。ベントは既に検討という話が出ていましたから。ベントについては、私はやはりこれは放射性物質を降らせるわけだから大変なことなのだ。それをやるのが定石かもしれないけれども、それをやるのならちゃんとしたデータが必要だということを言いました。

東電の係長に言いまして、保安検査官の方はどうもちょっと要領を得ないので。そのくぐりだけは、詳しくはここに書いてあるとおります。

それで私は、ベントについてもしっかりと対応しなくてはいけないなと思い、それで初めは海江田大臣には到着の報告はしたのですけれども、松永次官に、ベントについてはまずデータの把握をしている、ベントは一義的には事業者の判断でやるべきだということを言いました。その後、保安院の会見で同様のことを言っているわけです。余りにも政治が前のめりになっている印象もあったし、そういうことを言ったわけです。

しかし、その班長が2時半ごろになったら、格納容器の圧力が設計圧力を超えてきたということを言ってきましたので、私は別に決定権はないのだけれども、了承したということがあります。

ですから、そこは大変緊迫していましたが、しっかりとデータの把握、冷静に対処しなくてはいけないということで行っていました。そのうち、3時前になって電源が復活したので、オフサイトセンターに入ったわけでありまして。それが1つ。

入った後の午前4時ぐらいになったら、今度は菅総理が来るという話が入ってきたので、後で詳しく見てほしいのですけれども、これは困ったなと。事務的には来ても来なくてもいいのだけれども、要するに全体の未曾有の災害対策としては、私としてはこれはまずいのではないかと。

つまり、津波も未曾有ですよ。テレビで繰り返し報道されている、家が流され、船が流され、港が渦巻いていて、人が何人行方不明になっているかわからない状況で、人命救助は72時間が鉄則ですよ。

ですから、それは72時間を有効に活用するというか、72時間はしっかりと人命救助に努力すべきだと。

それから、現地の状況は確かに現地に来て見ることもできるけれども、後で言いますけれども、全体状況を見るのは、今の時代では東京が一番いいわけです。通信手段もあるし、いろいろ。事故も全社的に対応しなければならないわけだから。ただそこへ来て施設の状況がわかるというのではなくて、東京にいた方が事故対応がしやすいのではないかという利点から、ちょっとまずいなと。

【取扱い厳重注意】

どうしても来るのであれば、一国の総理を安全に過ごすというか、何らかの危険な目に遭わせるべきではないので、オフサイトセンターに来なさいと黒木審議官に言ったのだけれども、黒木審議官も保安院に言ったのですけれども、後で聞くとどうも保安院止まりだったらしい。官邸との間にコミュニケーションが成立していないというのかな。これは何か理由があると、断定できないけれども僕はあと思う。

それでいよいよ菅さんが来ました。私が発表したわけではなく、メモランダムを書いてずっとフォローしている記者がいたから、それが真面目なドキュメントの記事として発表するということですから、それはやはり後々のために必要だと思って出しましたら、何と菅が怒鳴りまくったことだけ書いてあるわけです。非常に遺憾なのですが。

だけど、その内容は客観的な事実なのです。後でそれを否定したようなあれが新聞に出ていますけれども、全く客観的な事実で、私だけが感じたことではなくて、みんなその場にいた人は感じて、ちゃんと裏をとってあるわけです。非常に強烈な印象ですから。

菅とは私はずっと付き合いがあってよく知っているわけです。寺田補佐官とかよりはるか前から知っているわけです。ずっと一緒にやってきて。イラ菅で有名ですが、この日は特別なものがあって、かいつまんで言うと、バスに乗り込んだら、私はバスの配置を決めておいて、武藤さんと並んで座ってもらったら、いきなりそこで怒鳴りつけて、何が何だかわからない。とにかくベントだと思うのですが。

今度は免震棟に入った。そこに交代勤務だと思うのですが、作業員の人が大勢いた。中には上半身裸というか、除染などの人だと思うのですが、大変だなと思ったのです。その前で菅は何と言ったかという、何でおれがここに来たと思っているのだと言ったのです。これには私はあきれました。

武藤や寺田に言うならまだしも、一般の人の前で言ったので、イラ菅にしても今日はひど過ぎるなと思って。秘書官なんかみんなびっくりしたと思うのだ。

今度は上に上がって行って、武藤と吉田に会ったわけです。それはここに書いてありますけれども、要するにベントについて言って、最後は決死隊をつくってでもやると言ったので、そこはちょっと落ち着いた。菅は落ち着いていなかったけれども、一応ちょっとね。

だけど途中、■■■■に怒鳴ったり、内堀に安定ヨウ素剤のことを聞いても、つまらないことで怒鳴ってみたり、終始ひどかった。大荒れでした。ただし、私については何も言わない。それは長いあれがあるのかもしれないが。ただ、私にはドアを出るときに頑張ると言いましたが、そこは冷静だったかもしれないけれども、すごかったです。私が言うのだから間違いない。

それでバスで、ごく近くのグラウンドから飛び立ったのだけれども、ヘリのエンジンが冷めてしまってなかなか飛び立てなかった。私たちはずっと立っていましたよ。もう帰れと言ったけれども、立って見送っていった。

事故対応そのものではないが、指導者論に関わるのですがね、私も大学でリーダーシップ論をやってくれというので頼まれてやっていたけれども、それだから言うのではな

【取扱い厳重注意】

いですよ。ずっと政治家などを見ていて、まずいなど。

まず、サイトというか、原発の現場に来たことは、私の考えは先ほど言ったような見解です。

それから、菅の態度については、大変遺憾だと思うのです。特に民間人に、「一体何のためにおれがここに来たと思っているのだ」、これは本当に呆れて、私は寺田に出がけに、寺田もこの世界では新人みたいな人ですから、寺田に「総理を落ち着かせろ」と。文章には、落ち着かせろと私が言ったら偉そうだから、落ち着いて何とかと書いてありますが、落ち着かせろと言ったのです。寺田は黙って聞きますよ。それは私と彼の関係だったら。

副大臣といえども内閣の一員ですから、審議官とか武藤とか副知事には申し訳なかったと謝った。それぐらい大変な激昂でした。

僕は人を後ろから鉄砲で撃つのは嫌いだから、菅さんにもこの文章を渡しました。ただ、非常に遺憾なのは、打ち消しにかかって、あの日以外はほとんど冷静だったと朝日の記事で言わせたり。ということは、あの日は激昂したということでしょう。

[REDACTED]

それは余談ですが、私が一番考えたのは、指導者がこの災害に格闘しているわけですから、やはり指導者は冷静でなければならないということ。それで、中曽根さんのことを思い出した。

当時、中曽根さんの評価はよくなかった。特に総理になってから座禅を組んだのは、スタンドプレイ。だけど、福島で私が考えたのは、中曽根さんを再評価したんだよね。中曽根が座禅を組んだのは、今にしてわかった。

つまり、指導者は冷静に、一国の総理はいろいろなことが官邸にいれば来るわけですから、沈思黙考して考えなければならんということで、やはりあれは彼にとって必要だったのだと。

だから、座禅という方法でなくても、トップリーダーというのは、静かに思い沈んで、時間が短くてもいいから思考はものすごく大事ではないかと私はそのとき感じたのです。それで秘書官にも言ったのです。それがその一つ。事故後の対応のハードの面ではないけ

【取扱い厳重注意】

れども、いきなり冒頭の指導者論みたいなので、ちょっと異質かもしれないけれども、現実には起こったことですから。

今回のあれでいろいろありますよね。保安院長との意思疎通がどうだとか、目の前にいたのにコミュニケーションをとれなかったとか。 [REDACTED]

[REDACTED]そこはやはりコミュニケーションに問題があったということは言えると思うね。

これは推測だからまだいいですけども、要するに一般論から言えば、年じゅう怒鳴られたら、その人に相談しないよな。僕らの事務所でも会社でも。そこは裏がありませんから、わかりません。

[REDACTED]

それから、ちょっと異質な話をしましたけれども、現地対策本部であります、人がだんだん集まってきました。初めオフサイトセンター機能不全と言われていましたが、それは、DG というか、停電したり何かしたりで初めこそ人がいなかったのですが、東京から言ったら遠隔地でもありますね。だけど、だんだん集まってきました、菅総理が帰った直後、すぐに会議を開きました。そのときカウントしたわけではないけれども、40人ぐらいだと思うのです。

資料の8ページ、こちらは全員に渡っていませんが、総理が出た後、そのころは現地対策本部は放射線班が緊急時のモニタリングを実施しています。機能していないと言われてはいますけれども、8時9分～19分。

それから、9時には第1回機能班責任者会議をやって7班の配置、業務開始状況を確認した。最初ですから、続いて第2回を開いて、各機能班の実施状況の確認、対応方針の検討、放射線管理の徹底。

10時半には、それを重ねた上、全体会議を開いて、各機能班の実施状況の確認。了解とか何とか、不明とかあるのですが、OFCの活動実施方針というのを決めたわけです。13日夜の文章の中に1項目入っていると思うのです。OFCの活動実施方針、こういうことをやる。業務内容が書いてあります。

それから私の指示を決定した。私はそこで皆さんに対して、徹夜して参集したことに感謝する、スタッフの連携協力を強め、事実を予断なく把握して、熟慮の上、果敢に実行してほしいとあいさつしたわけです。メモがありましたので。

[REDACTED]はそのころから動いたのですが、それで、避難状況の把握と地域住民への広報、ヨウ素剤の搬入準備等について、県や関係庁へ指示をした。

それから、ベントが行われていましたが、14時半ごろベントが成功したという連絡が

【取扱い厳重注意】

入ったわけですが、その後、15時36分、最初の爆発があったわけです。本部にすぐ通報しまして、武藤副社長からそのいきさつについて説明を聞いた。水素爆発だとジルコニウムがあれしてはどうだというメカニズムを私は聞きましたけれど、これは容易ならないということを感じたわけでございます。

○質問者 池田先生が現地本部におられるときに、水素爆発の音は聞こえましたか。

○池田元副大臣 音がしたという話は聞いたけれども、音自体はリアルタイムで聞かなかった。

○質問者 オフサイトセンターにいる方で何か音がしたと言っている方がいたということですか。

○池田元副大臣 そう。自衛隊かな、大きな音がしたという通報がすぐありましたから、私は本部へ連絡しました、たしか。

それで、ざっとこれいきます、質問の時間もあれしなくてはいけないから。ちょっとはしりまして。

6時には20km圏内に住民に対する避難指示が出たと。それで直ちに全体会議を開いて、応急対策を決定した。

東京の方では海水注入の話がいろいろあった。現地ではいろいろな、被ばくというか話の可能性が話題になってきたと。

12日はそういうことで終わって、13日は1Fの3号機がおかしくなってきた。まず、注水が難しくなってきた。ここに書いてあるように、HPCIで注水していたのが温度と圧力が低下したため停止して、RCICも起動しなかったと。

ベントの方も開という状態になるのだけれども、またうまくいかないということで、断続的に実施したが総じてうまくいかないということでした。細かいことはここに書いてあるので。

現地本部は除染レベルの設定のための打ち合わせ会議を開いたりしていたのですが、それで各町村に指示をしたりしていました。

13日の夜は非常に危機的な状況であっても一進一退でした。そこで私は最初の2日間の活動状況をこの辺でまとめて、せき止めて、本省と大臣に送ろうということで送ったのがその資料です。

13日の夜にはまとめて、クロノロジーには、14日の零時半に、本部の方の池田海江田大臣あてにペーパーと書いてあります。

13日朝にかけては、3号機の注水が滞って、格納容器の圧力が上昇したと。発電所長から冷却機能を失うおそれがあると通報があったと。連鎖的に1号の後は3号です。

いろいろありまして、その情報は全部時報みたいな、1時間ごとに私のところに来るわけです。プラントの状況という、保安検査官だけではなくパラメータという第一緊急対策本部から。それから、テレビ会議はものすごく有効で、事故調のあれにも書いてあったように、ERCに置くべきだったなど。あのとおりなんだけれども、すごく有効。だから、デー

【取扱い厳重注意】

夕も来るし、私たちはそこに副知事とよくいました。

それで、3号が未明から、これもなかなか大変でして、相当危機的な状況になってきたと。7時46分に格納容器圧力異常上昇、冷却機能喪失となってきた、武藤副社長から本部に「池田さん、ちょっと頼みたい」「何だ」と。

それが先ほどの資料ですが、とにかく水が欲しいと。それで、14日8時20分に武藤さんから自衛隊の給水車等を配置換えしてくれ、急ぐと。自衛隊、自治体消防も行ってたわけです。第2から第1に配置換えしてほしいという。

自衛隊、自治体消防の人を朝早く集めて、協議して、現地本部長の判断で配置換えを指示した。勿論、本部にも事後了承をとった。本部のクロノロジーにも10分後に書いてある、本部長の判断でと。そのクロノロジーにも書いてあります。

それで、配置が始まった途端に、11時1分に水素爆発と思われるものが起きたわけです。これは非常にびっくりしました。今、指示して再配置したばかりで行ったところでしょう。8時20分に指示をしたから第1から第2に行って、川の水をくみ上げたりというのはまだいいのだけれども、自衛隊車に給水したり、そこに書いてあるように。それから、ろ過水タンクに入れたり、これはびっくりというか、しかも、再配置した人たち、自衛隊員や作業員、自治体消防の職員も行方不明です。リアルタイムというか、目の前でテレビ画面に出てくるわけです。事故現場の写真ではなくて緊対の雰囲気がね。全員行方不明、わからない。あの瓦れきの中に入っていったのかなといろいろ。戦場の司令官というのはこういうものかなというのは、内心ね。

どのぐらいかかったのかな。緊対のあれを見ていたら、東電の作業員が1人、見つかったというんです。よかったというのですね。 [REDACTED]

[REDACTED] それでまだほかの人たちは見つからない。そう思っているだけで、勿論、黙っていましたよ。

そうしたら、かなりたってから次々と発見して、重傷者が1人、東電の作業員。自衛隊4人は軽傷、東電の関係の作業員は1人重傷で6人軽傷というのが、かなりたってからわかった。官房長官が会見していますが、そういうことがありました。

それに、これはちょっと水をちゃんとやらなければいけないなと思って、これも私の判断で午後、時間ははっきり何分とは覚えていないけれども、やはり自治体消防でも地方の自治体消防ではなくて東京のハイパーレスキューみたいなもの、これをやはり活用しなければいけないと思ひまして、正午過ぎに松永次官に電話をしたのです。

これは保安院経由でやるといろいろなところを経由するから、うまくいかないのではないかと。私の少ない経験から言うと、自治省を担当したことがあるのだけれども、要するに東京消防庁とか何とか消防庁は都道府県で独立なのです。自治省とか総務省消防庁は消防庁だけ、国のあれなのです。だから、動かすのが難しいのです。

だから、次官同士の横のあれがあるから、松永に言って、自治体消防の専門部隊の派遣を要請してくれと言ったわけです。

【取扱い厳重注意】

その後のことはよくわからないのだけれども、結局、東京消防庁のハイパーレスキューが放水を開始したのは、19日の午前零時半なのです。海江田が何かいろいろなことを言ったこともあったのですけれども。その夜、NHKの夜中の臨時のあれで、今、ハイパーレスキューの担当者が2〜3人出て、涙流して、みんな英雄という感じでしたよね。そのときに聞いていたら、どこかの河川敷に行って予行演習していたというのですね。

これは別のところで調べていただきたいけれども、私が頼んだのは14日の正午過ぎでしたが、現実には5日後というか、19日の午前零時半ということでありました。

それが1Fの3号機の話を中心にしました。

1、3の次は2です。2号機が14日午後6時ごろから非常におかしくなってきた。

初日も2号機が話題になったのですけれども、これは東電の班長が私のところに飛んできて紙を渡して。そのときのやつがどれだったか。

そのとき紙を見せたのです。私はパッと書いた。18時22分燃料露出。20時22分、炉心熔融。22時22分、格納容器損傷。つまり破裂ということ。もう単純に2時間、2時間になっているのですけれども、これはもう大変な事態だと説明を受けた。

ベントもだめ、注水もだめだ。こういうふうに推移すると。すぐに保安院経由で本部に上げましたが、このときはこれでいよいよ来るのかなという感じでありましたね。

スタッフというか、幹部に言って、ミーティングを2回やって、まずこういう状況だから、あらゆる事態に備えるようにしておいてくれと言ったわけです。オフサイトセンター全体が、非常に緊張していました。

ところが、ここにも書いてあるけれども、東電の場合はベントのチョコチョコと言うのですね。チョコチョコが出るようになった。注水も入り始めた。しかし、予断は許さないと。そう長続きはしなかったのですが。しかし、基本的な流れはそういう流れ、理解でしたから。

19時20分に保安院、東電、福島県、自衛隊の代表と今後の方針について検討。

私は現地本部長で、事務局長は審議官の黒木君がいたのですが、それ以外に東電の副社長。武藤さんは7時ぐらいに交代して小森常務が来ていました。福島県の内堀は私とずっと一緒。自衛隊は中央即応集団の副指令がこの日の16時に着任して、今浦さん。これも幹部会みたいやって、私のごく狭い部屋ですがやって、なかなか移転するにしても場所がないと。150人、車や人を配置できて通信手段が整う場所がない。

内堀君の提案で、福島県庁の旧庁舎の政庁はどうかというので、それも遠いけれどもいいなど。テレビ会議システムは東電の福島事務所から入るというのです。私の心の中では、それが大きかったと思う。そういうこともありました。

それで、再度緊急全体会議を開いて、移転の可能性を説明したと。準備をするように指示した。私の判断で、いきなり行っても、また業務を再開するのに時間がかかるから、先遣隊を派遣しよう。先遣隊を出すと言ったら、内堀が行くというから、内堀君行ってくれと。それで先遣隊を出した。

【取扱い厳重注意】

翌日、午前零時 10 分ごろに到着したというのがあって、その後、内堀はものすごくしつかりやってくれたのですが、業者を叩き起こして、政庁を整理してくれた、机を入れたりいろいろ。

その間に、私は、9 時 15 分となっていますけれども、大臣に対して現状説明し、OFC 移転の相談と書いてありますけれども、このときは基本的に大臣の了解をもらったのです。そもそも OFC 移転については、ずいぶん前から話はあったのだね。

ただ、その間に一番強調したことは、それは一番最初にやらなくてはいけないのだけれども、2 回目の会議のときに、我々だけ現場を離れるわけにはいかない。難破船の船長と同じで、我々はやはり住民が全部出てもらってから。勿論、移転を拒否している人はいたかもしれないけれども、その後で我々は移転をするのだと。ですから、住民が残っていないかどうかをチェックしてくれと強調したわけです。

これで、翌朝は 2 号のサプレッションプールが爆発というか損傷したわけです。一方、私としては移転のことについては住民のことが一番気がかりだったということでもあります。

それで、その双葉地区の要救助者リストというのは、私の [REDACTED] 中であつたのですが、いろいろなことをやっていました。当時、余りはっきり覚えていないのだけれども、つまり、14 日未明辺りからそういうところを言っていて救出活動を始めていたと思うのです。

その日の朝、双葉病院。これはいろいろ情報があるのですが、警察に言ってもわからなくて自衛隊でわかったという話があるのですが、要するに自衛隊が住民の支援をやっていましたから、12 旅団が一番よくわかっていたと。それで双葉に人がいると確認できて、これはそのときの詳しい所在、後で聞いた話では、12 旅団から住民用の車を出して、同時に現地対策本部から指示というか段取りをつけるために自衛隊のジープで 3 人派遣したと。

今浦指令によると、8 時 35 分に自衛隊の今浦副指令の部下と住民安全班と県警の一人がジープに乗って双葉病院に向かって、そして現地に行つてすぐに合流したと。合流したのは、要するに住民を救出するための 12 旅団の車両。大型バス 2 台、救急車 3～4 台。

それで記憶のあれもないのだけれども、一番よく覚えているのが朝に、今浦さんだと思つたらそうではないので、本部長、私に対しては、双葉病院はピックアップしましたという連絡が入つたのです。

今浦さんかと思つたら、そこは違って。要するに自衛隊の 3 人から今浦に会つて、今浦から審議官辺りが聞いて私に言つたと。直接、今浦ではなかった。初めは今浦かと思つていたのだけれども。別にそこはどうでもいい。行つた自衛隊から、私、現地本部長に全員救出をしましたと。6 人救出したという連絡が非常に脳裏に焼き付いているわけ。それで本部長としてはゴーサインを出した。

なお、海江田大臣ですが、朝にこういう状況だと電話をしたのです。説明するために私が衛星電話をした。そうしたら海江田が出てきて、池田さん、まだいるのと言うわけ。

いろいろ文書が残っているから、翌日移転を決めたというのは違いますよ。池田さん、

【取扱い厳重注意】

まだいるのと。住民を放っておくわけにはいかないでしょうと言ったら、別に自慢でもなんでもない、海江田は僕に、それは池田さんらしいと。事実、そのところやったのです。

そこに残っている文書は、それは後で保安院に注意しましたがけれども、私が前夜に上げたのです。私は文書でちゃんとやります。だって、組織人だから。海江田の了解も得たわけです。それで、向こうでも受けて終わりの話なのに、わざわざその文書を、今もあるのだけれども、もう一度送ってきて、これで判断でいいかと、もう一度資料を合わせるような文書にして送ってきたわけ。

○質問者 修正してということですか。

○池田元副大臣 ちょっと修正して。修正してといっても、内容の修正なんてほとんどない。そんなもの、ありませんよ。

それで、私は叱ったわけです。それは6項目にも入っているけれども、この非常時にそういうことをやっていたら、矛盾でしょう。もう一度、確認するように。勿論、私のことだから文書を出した。海江田の口頭で、勿論、了解をもらったのだけれども。

ありますよ。たくさんあるので見て。

○質問者 これが15日の朝の。

○池田元副大臣 これ。これが15日。

○質問者 朝8時ぐらいにした。

○池田元副大臣 これは私は叱ったけれども、事後承認で文書を整えたという意味なら別にいいのだよ。実態はこうと違うから。わかりますか、官僚によくあるではないですか。

この文章は、その前夜に私が書いた、筆を入れた。

だから、これは事故調で話題になるとは思わなかったのですが、私としては保安院の連絡の仕方として非常に遺憾だから、注意と言うか、 指示した、申し訳ないということになっているのはそういうこと。なぜ、また改めてやるのだと、私が全部書いているのに。これがあります。

これは秘書官もよく知っているよね。私がそれを遺憾だと言って、あとで注意したわけですから。それはそんな話で。

それで結局、10時59分に郡山というか、都路街道を通過して福島県庁に行って、そこで松下副大臣が待っていて引き継ぎをしてというのが、最初の方の。

その後の事故対応もあったけれども、保安院に対する6項目の指示も出したし、現地へ行った経験から言って、タイベックスーツとか防護品とか、物資が足りているかどうか全部チェックしろと経産省の部局に言ってチェックしました。

それから、INESの発表の仕方。レベルが全然ずさんな発表だから注意をした。私たちに相談も余りなかったし。ほとんどそれに書いてありますが。

大変だったのは、戻ってほとんど毎晩遅くまでやったのは、石油パニック対策。これも拡大輸送ルートと緊急措置を決めた。JR貨物などを使って、広域的な。

そして、また3月末から再び行って、そこは最後の資料に書いてあるとおりにやりまし

【取扱い厳重注意】

た。また個別には内容を説明しますが、大体流れとしては以上のようなことですので、何なりとお聞きいただければ。

○質問者 ありがとうございます。

最初の方から時系列的に、順番にお聞かせ願いたいと思います。

もうほとんど聞きたいことを説明いただいたので、非常に細かい話になってしまうのですが、当初、池田先生が現地本部長で行くということには、もともとはなっていないで、本来であれば、現地対策本部長に松下副大臣が行くということになっていたのでしょうか。

○池田元副大臣 全く関知していない。

○質問者 防災訓練などで行っていますよね。

○池田元副大臣 ただ、防災訓練などのときは松下君なのです。

○質問者 そうですよ。

○池田元副大臣 私は経産省では何をやっていたかという、明確には規定はないのだけれども、私は■任大臣、トップの副大臣なのです。松下は私の後。私は予算とか税制とかいうものやってきた。松下君はどちらかという、原災なんかが起きるときの現場に行ったり、海外のいろいろな交流とかをやっていました。

ただ、わからないけれども、これだけの事故だから、いやおうなく私に来たと思います。何もそのとき、だれも疑問に思わないし。あとから松下君が行ったし、あれだからそうなるかもしれないけれども。これはごく自然だった、副大臣をやっている以上は。トップの、■任の副大臣として。

○質問者 わかりました。

12日午前零時ごろに現地に到着されて、いろいろプラントの状況について保安検査官からの説明等を受けられたということなのですが、既にその段階では11日の午後9時過ぎごろに現地は1Fから3kmの外に避難せよという避難指示が出ておりました。

○池田元副大臣 そうです。

○質問者 その避難状況については、何か報告はございましたか。御記憶はございますか。

○池田元副大臣 報告はない。ないけれども、たしかニュースで聞いたと思います。

○質問者 わかりました。

○池田元副大臣 それは、例えば内堀は私に言ったかもしれないけれども、記憶がないというだけで、ないとは言えない。

○質問者 記憶喚起で、例えばこんな話はございましたか。3kmの区域はほとんど津波のときに避難していて、もう避難も終了していますとかいう話は御記憶にございますか。

○池田元副大臣 町の職員が大変だという話は聞いたけれども。

○質問者 わかりました。

○池田元副大臣 最初は、先ほど言ったような話で、ベントとか事故の鎮圧の側が中心です。内堀がいたのはよかったです。

○質問者 引き続いてオフサイトセンターの話になりますが、済みません、2ページ目の

【取扱い厳重注意】

ところで、横田所長に指示した、これは吉田所長ですか。

○池田元副大臣 いや、これは横田。保安検査官。

○質問者 保安検査官室、わかりました。

○池田元副大臣 どこかに書いてあるよ。

○質問者 失礼しました。保安検査官の横田所長ですね。わかりました。

○池田元副大臣 これが要領を得なくてね。

○質問者 最初の説明された方が横田所長ということですね、わかりました。

それから、先ほどの御説明の中で、このメモランダムの中にあるのですけれども、ベントは一義的に事業者の判断で行うべきことを伝えるとあって、その前提として、政府の方がかなり前のめりに入っている感じがあったと。具体的にはどういう認識でいらしたのですか。

○池田元副大臣 ですから、先ほど言いましたけれども、海江田大臣が記者会見をすると。東電ではなく海江田が記者会見をするというから、正しい政治と企業というか、この社会の在り方というか、責任論というか。これはやはり政府が一義的に発表するのではなくて、事業者がやるのは当然だと。何も法律を読んだわけではなく、私の考えです。そのとおりだと、みんな言いますよ。それで私が言ったわけです。

ベントだって、そんなあやふやなことをやって、政治の責任になったら困るでしょう。事業者が一番わかっているのだから。事業者が具体的にやるのだから、それを政治がサポートすればいいのであって。でも、みんなわかっていたから、保安院の会見でもそう言っているわけだけれども、ちょっと政治的に前のめりになる恐れがあると感じた。

○質問者 わかりました。

菅総理が来られたときの状況については非常にリアルに説明をいただいたので理解いたしましたが、その後、オフサイトセンターに戻られて、当初 OFC の要員が 40 人ほどいて、その後 140 人ぐらいに増えていったという話でしたが、このときから、つまり 12 日から福島の方に移転される 15 日までの間になかなか集まりが悪かったという印象はございますか。

○池田元副大臣 そう言われていますけれども、評価の問題だとしたら明らかで、あくまでの事実関係でいえば、40 人ぐらいが結局、最終段階、15 日ぐらいには 140 名ぐらいになったわけですが、勿論、中にいる人もいて外に出ている人もいるからあれですが、あの状況の中で、私の当時の感覚から言うと、会議をやっても各班全部いるわけです。だから、欠落したという印象は全くない。

ただし、せっかく事故調さんが、それはいいことですけれども、厚労省が来ていなかったというところが一番、ティピカルな例かな。官房長に来てくれと言うと、厚生何とか課長が来て、ついこの前、聞きましたよ。そうしたら、医政局への連絡が十分なかったという言い訳をしていました。

要するに、15 日にハクノというのを県の災害本部に派遣して、19 日には 2 人、県の方

【取扱い厳重注意】

へ行って兼務にさせた。最後、OFCは21日から専任になったという話で。ただ、ERCへは情報を取るために人を出した。医政局への情報伝達は十分ではなかった。これが私の厚労の厚生科学課長に対するヒアリングの結果なのですが、私はそこまでちょっと問題だと思ったのですが、しかし、誤解しないでください。現実、痛痒はそれほど感じなかった。

なぜかと言いますと、医療班にいろいろ問題はあるにせよ、医療班はちゃんとあつて人はいたのです。本部長はいちいちそんな細かいところまで関与していないから、医療班やっているなど。

黒木に聞いてみたら、医療班はちゃんといたではないかと。いたと。医療班はどこから来たかと言ったら、細かい内容はわかっているけれども、要するに放医研とか県の保健所とか、日本分析センターから来て、大体最初から6人いたのです。

だから、現地本部長としては欠落しているなどと考えもしなかったし、業務は行われたわけです。除染の基準まで決めているわけだから。

そこを私があれしたいのは、オフサイトセンターの機能不全だとかも、大きく丸めて何度も書いてあるけれども、正直に申し上げて、そこは違うのではないか。それは個別、具体的に書くべきです。

それから、もう一点。後で総括的だけでも言いたいだけでも、簡単に文章は書けるのです。マニュアルを持ってきて、マニュアルとおりに来なかったと。でも、そのマニュアル自身がおかしくなっているのだから。

だから、そういう点で立論の、はっきりしてやった方がいいのではないかという感じはしました。結局、具体的な事実ね。だから、あとちょっと遺憾なこともないわけでもないけれどね。

○質問者 例えば除染基準、ちょっと細かい話というか技術的な話なので、本部長まで上がっているかどうかというのは、もしかしたら上がっていないかもしれないのですが、現地と県、除染するのは福島県ですので、作業をする福島県と国との間で除染基準が違って

いて。

○池田元副大臣 出ていたね。

○質問者 それが結局、違ったまま何日間か国の方の指示が出されないで、最後は国が。

○池田元副大臣 6,000cpmですか。

○質問者 おっしゃるとおりです。それか、10万かということなのですが。それについては何か。

○池田元副大臣 県の方は意識しなかった。我々の基準は決めたということは本部長は理解してはいて、食い違いとか何とかは当時は意識していなかった。

○質問者 わかりました。

○池田元副大臣 先ほどの人のことでちゃんと言っておかないといけないのですが、その文章とか現実問題として、オフサイトセンターが機能しないというのは全く違って、そういう部分もあったかもしれないけれども、基本的には業務を継続してずっとちゃんと執

【取扱い厳重注意】

行したわけです。

ただ、厚生省はそういうことで来なかったけれども、ちゃんと初めからカバーしたと。文科省の放医研とか。

先ほどの移転に絡む話なのだけれども、これは言っていないんですが、移転をするときに住民がとにかく残っていないかということが私にとって重要なことでありまして、それと同時に、それが一番大事なだけれども、やはり業務の継続性も大事だと思った。だから、先遣隊を派遣した。

それから、みんなが整然として業務を損なうことなく移転すると。そのために2回目の会議では、点呼は各班何人いるか、私の指示で全部申告させたわけです。そうしたら、福島について出発かと聞いたら、来ないやつがいるのです。

○質問者 オフサイトセンターにいたのということですか。

○池田元副大臣 そうではない。いないやつがいるのです、いなくなった人間。ふけたと思っていたの。初めはそう思っていた。これはやはり重要な仕事だから、前夜に医療班何人、住民支援班何人、7班全部チェックして、車はどうと。ちゃんと整然とやるのが私の主義だから、こういって、総括班長にメモを取らせた。

ところが翌朝、行くときになったら数が足りないところがあつた。医療班、業務支援班。業務支援班はいろいろ、業者だから、ある程度仕方ないところが、業務支援のために来ている、電気会社のあれとか電気工事会社とかだから。それで、医療班も班長以外いない。

それも後で調べたのだ。私の一番気がかりだった。責任を果たすというのは、私のあれでやっているのに、そういうのでは。

結局、厚生省が来なかったので、放医研とか6人でやっていたのです。彼らはやってくれた、ちゃんとやった、任務を果たした。ただ、その晩に、■■■■君が来たんだな。それで14日の晩は7人だったのです。

ところが、2人は福島の第2病院へ行つたと。2人は放医研に戻つたと。それから、2人は県庁へ独自に行ってしまったと。1人だけが我々本体と一緒に行つたと。

つまり、私は初め、ふけたのはけしからんと、今でもふけたというのはおかしいと思うのだけれども、事情を聞いてみたら、要するに本部長の指示に反して無断で県庁へ行ったりしたと。100%戻っているわけではなくて、ほかの病院へ2人行つたり、2人は放医研に戻つただけだけれども、あとの2人は県庁へ無断で行つたと。みんな無断で行つただけだけれども。それで、■■■■君という1人だけが我々と一緒に福島へ行つたということがあつたということを今日、初めて申し上げた。

もっと脱落者が多かつたのではないかと思つたが、そうではなかつた。結局、あの危機的な状況の中で、しかも厚生労働省が来ないときに放医研の人たちが一生懸命やってくれたのだけれども、最後のところで結局、1人はちゃんとやったけれども、ほかは独自行動というか、無断であつたと。

仕事を放棄したわけではない。交代で2人戻つたのはいるけれども。仕事を放棄したの

【取扱い厳重注意】

ではないかと思っただけで危惧はしたのですが、それだけ私はチェックしたのです。神経質ではなく、当たり前ですが。それはあります。

要するにそういうことで、厚生労働省が来ていたらどうかかわからないけれども、本部長としては与えられた条件の中で最大にみんなやってくれたと思うのだが、その点だけが若干の心残り。

いろいろ世間の人はいうけれども、与えられた条件の中で現地本部のみんなはよくやってくれたと思うのだけれども、そういうことがありました。それはちょっとやはり事故調だから言っておかないといけない。

○質問者 その6人の方は、ちなみにこれは確かにやむを得ないなというような事情はあったのですか。

○池田元副大臣 後から聞いた話。初めは私は本部長として遺憾に思っていた。だって、私が全部チェックさせて、朝に行ったらいなかったのだから。

○質問者 後から聞くとみんな、それなりにやむを得ないなというような理由だったのでしょうか。

○池田元副大臣 理由が、全く放棄したというのと違って、病院に行ったり、前夜早くも浮き足立って県庁に行ってしまった。だから、職場放棄とか職務放棄というのは薄くなってきたわけです。

○質問者 この1人残っていたのは、どこの医療班の所属ですか。

○質問者 ■■■先生は放医研ですね。

○池田元副大臣 放医研だね。だけど、医療班はちゃんといたのです。ただ、移動のときに、初め私が受けた報告では脱落というかいなかったから。でも、後で調べてみたらそういうことだった。それだけチェックしたのです。

○質問者 わかりました。

それから、原災本部長権限の現地対策本部長への権限委任の話は、質問項目の中にも入っていますが、これについてはオフサイトセンターの方で黒木審議官と何か話をされた記憶はございますか。

○池田元副大臣 これは明確に覚えていないのだけれども、多分あったと思うのだけれども、わからない。そこは無責任なこととは言えない。ただ、そういう事務的なことはすべて事務方に任せていたから。悠長なとき、普段なら全部関心をもってやるけれども、重要なことかもしれないけれども、それは任せていましたから。ちゃんと事務方はやったのだけれども、結局、催促したけれどもそうならなかったわけでしょう。

だけど、実態行為としてみなして決裁とれたということで、12日から指示文書を発出しているから。それが障害にならないように。

○質問者 それは非常に我々としては積極的ないい判断だったなど。

○池田元副大臣 そこで止まってしまったらおかしくなってしまうじゃないですか。

○質問者 はい、おっしゃるとおりで。

【取扱い嚴重注意】

○池田元副大臣 現地は、あの条件の悪い中で本当によくやったと思う。

○質問者 わかりました。

○池田元副大臣 ちょっと2～3分休憩しませんか。5分ね。

○質問者 14日から15日にかけて、2号機の状態がおかしくなり、かなりこの時期、線量も相当上がっていたと思うのですが、その線量の状態は。

○池田元副大臣 線量に対する意識は、私はなかった。壁にあったのです。

○質問者 線量計ですか。

○池田元副大臣 そう。2階の壁にあったのです。

ただ、上がってきたとか何とか言っていたけれども、私が見たときは余り上がっていませんでした。帰ってくると、だんだん、全部入り口の規制が厳しくなってきた。あれしたり、脱いだりしましたけれどね。

ただ、信じられないというか、本部長としては放射線防護のシールドとかがなかったというのは、あのとき知らなかったですよ。そんな意識はなかった。もう当然、そんなことはやっているはずだと信じているから、何も疑問も持たない、前線の非常用設備で。

でも、考えて見れば、蚕棚も飯もないという状況だから、すべて疑ってかかった方がよかったのだろうけれども。そんなことありえない話があり得たのだね。

○質問者 食料はカレーしかなかったのですか。

○池田元副大臣 それは資料にもあって、レトルトのご飯とレトルトカレーしかない。水とカロリーメイトだけで3日間。

資料はいっぱいあって、総括班というか支援班に調べさせたら、みんなチェックしたら最大3日分。しかもそういうふうに種類が少なくて。

後で私が帰ってきて、16日に保安院に指示をしたら、その後に行ったときはもういっぱいあったけれどね。そのときは町がやっているからそんなものは余り食べなかったけれども。

だから、飯を1回食べ損なうと大変。毎日同じだから、2～3日目かに1食抜いたら、次に食べられないでしょう。1日2回だから。劣悪でしたよ。

本部長室とあったのがこの半分ぐらいで、全部木なのです。だから、寝ても寝ることができないくらい。夜中の2～3時にテレビがついたりなんかしているところで皆さんは突っ伏して寝ていた。最後は地べたに段ボールか何かを敷いて寝ていた人もいた。これが非常用設備か、緊急応急対策をするところかと思った。

○質問者 寝具というか、毛布もない。

○池田元副大臣 ない。

○質問者 ないのですか。

○池田元副大臣 ない。内堀副知事も全部同じ。こういう大部屋の机の上であれするといふ。

○質問者 暖房はいかがですか。寒さはどうして。

【取扱い嚴重注意】

○池田元副大臣 暖房はあった。暖房も全部、支援班が庶務的な判断で。暖房も燃料が補給が効かないから。3日目、2日目、それも全部調べた表があります。みんな自給というか、余りできない。

○質問者 オフサイトセンターの建物の中では、マスクとかタイベック着用まではいかなかったのでしょうか。

○池田元副大臣 一生懸命やっていたので余り鮮明に覚えていないけれども、後半はつけている者もいた。私は全くつけなかった。防護服などはつけていました。ここまでやる人は少なかったと思うのだけれども。

○質問者 マスクはつけなくても白いタイベックは着ている人は多かったですか。

○池田元副大臣 考えてみれば不思議で、シールド、防ぐものがなかったんだものね。これは本当に、事前の備えがひどかった。

○質問者 中間報告でも書かせていただのですが、かなりいっぱいある電話回線とかFAXとか、通信回線が地震の段階でかなりやられて、非常に東京との連絡が困難を極めたということをヒアリングで聞きました。

○池田元副大臣 6項目の中の1項目で、結局、うちの方ではなく、まず県の原子力センターへ行って、記録には書いてあるのだけれども、一応の通信設備も、そこは衛星電話が1台ありました。1台しかないから、そのとき海江田と松永に電話しただけで、そう頻繁にやり取りできない。

それから戻って、オフサイトセンターが主要だけれども、それは結局、衛星電話が2台しか持っていない。1台は兼用電話で、こちらのテレビ会議の方に1台あって、もう一つ窓際に1台あって、その窓際のをみんなが使い回す。したがって、幾ら現地本部長といえども、そう頻繁にできないし。だから、どうしても連絡に支障が出る。これもお粗末と言えお粗末。

○質問者 14日の午後7時20分に今後の方針について検討する会議を開かれたということですが、このときに移転すべきという議論をされているわけですか。

○池田元副大臣 ここのところは、7時20分は幹部です。移転を検討したのです。

○質問者 これはやはり大きな理由は線量ですか。総合的にいろいろな要因があったのでしょうか、大きな理由というのは。

○池田元副大臣 線量、それはひいては第1プラントから5kmの近傍だということです。

○質問者 2号機が非常に危ない状態になった。

○池田元副大臣 そう。だから第1の各1、3、2と連鎖反応的にあったでしょう。それで5kmでしょう。原災法でのプラントのところの境界線の放射線がどんどん上がってきているわけです。大熊町のオフサイトセンターは顕著ではないけれども、そういう傾向にあったんだけれども、いずれにせよ5km圏内でこれからいろいろなことが起きる可能性があるのに、20kmみんな避難させているのに、5kmだから移動すべきだと。

代替施設の相馬の方はもういっぱい使えない。小学校とかなんとかいっても、人がそ

【取扱い厳重注意】

れだけ収容できて、通信手段が確保できるところはない。それで県庁はどうかというので、あってよかったぐらいで、なかったらもうお先真っ暗ですよ。

そもそも、事故調の最後のあれでそうなるでしょうけれども、すべて事前の想定がおかしかったわけです。非現実的というか、そうではなかった。これだけの未曾有のアクシデントに対して応えるものになっていなかったわけです。

○質問者 後から見ればということかもしれませんが、5 km のところにつくるということ自体がね。

○池田元副大臣 国会の質問であるけれども、全国のほとんどがそう。データがありますけれども、近いところばかり。要するに事故を真剣に考えていなかった。防護もしていないというのだから。

○質問者 ちょうどこの14日夜に、非常に1Fが危険な状態になるということで、そこについていた保安検査官も戻ってくるのですが、その保安検査官が戻ってきたことについては何か、オフサイトセンターで話題になったり、あるいは話を聞いたりということはありませんか。

○池田元副大臣 それは後で私は問題だと考えました。そのときは把握できないから。それは後で聞けば、1階にいて、そこでも同じ状況だと言うのだけれども、やはり使命から言ったら、第一緊対というかプラントの方でチェックというか、担当ということ言えばそこにいるべきですから。

実は、2度目に行ったときに勤務表を全部提出させた。

○質問者 13日の早朝にということですね。

○池田元副大臣 そうです。御存じのように後で是正されました。後で行けということで。いつかな。移転したところのあれは福島に来てしまったけれども、また行ったのです。

○質問者 行きましたね。

○池田元副大臣 また行ったのです。だけど、私とすれば、それは非常に遺憾です。

○質問者 前の日の13日に改めて保安検査官を1Fに行ってちゃんと見なさいと言われた、その指示は直接には横田所長から出ているわけですがけれども、そういう指示を出すに至ったいきさつについて。

○池田元副大臣 前とはいつの話ですか。

○質問者 13日です。12日の朝に保安検査官は一旦戻ってきて、13日の朝にまた1Fに行きなさいと横田所長の指示を受けて行くのですが。

○池田元副大臣 それは横田が言ったのか。

○質問者 はい。現にそういう指示を受けて4人行っているのです。

そのときに海水注入をきちんと監視しなさいと言われたと言っていて、それは海江田大臣の方からそういう指示があったと聞いているところですが、そのいきさつは。

○池田元副大臣 それは明確に覚えていない。

○質問者 そうですか、わかりました。